

健康文化

階段の手すり

前越 久

健常者にとってはささいな事かもしれないが、健常者には気のつかないであろうと思われる事例について触れてみよう。私は名古屋市より身体障害者手帳の交付を受けている。最初は、4歳のときポリオに罹患し、24歳になって整形外科において右足関節を中心に形成手術を受けてたとき手帳交付を申請し、昭和34年8月20日付けで交付されている。手帳には障害名として、「脊髄性小児麻痺、両下肢萎縮著明、左足関節歩行上困難（5級）」と記されている。それから36年後の60歳の還暦を迎えたとき、心筋梗塞に罹患し、右冠動脈を中心に5本のバイパス手術を受けたため、その病院の婦長さんの勧めで再度手帳の交付を申請し、平成7年12月28日付けで障害名を追加して交付されている。その障害名欄には、「虚血性心臓病により家庭内での日常生活活動が著しく制限される心臓機能障害（3級）」と、記入されている。5級の障害者手帳のときは、手帳を持っているからと言って、これといった特典はなかったが、3級に昇格？すると、先ず地下鉄と市バスの福祉特別乗車券なるものが支給された。また介助者用の乗車券も同時に支給されている。これは地下鉄全線と市バスの全線に通用すると記されている。家内が私に同伴して地下鉄や市バスに乗車するとき、2人とも乗車賃が無料になるわけである。しかし、優遇されているからと言って、喜んでばかりいるわけにはいかない。家内が言うには、それだけ重症なんだから、もっと自覚してもらわないと困ると言うのである。確かに、はじめの2年間はまったく手帳を使う機会はなかった。自宅から名古屋駅に行くのにも、地下鉄に乗車することは無かったといってよい。家内の車で送ってもらうか、家内の都合の悪いときはタクシーに乗って名古屋駅まで行ったものである。それは、地下鉄に乗るためには、階段を上がり下がりしなければならないためである。私の心臓は、この地下鉄の階段に耐えるだけの力を持ち合わせていなかったということである。

丁度この頃、西尾名古屋市長の任期満了に伴う名古屋市長選挙が行われていた。何人かが立候補されていたと思うが、現市長の松原武久氏は選挙公約の一

つに、地下鉄の駅すべてにエレベータもしくはエスカレータを設置するというものがあった。当時の私の心境としては、この人以外には投票する人はいなかった。単純な理由ではあったが、名古屋市全体を見回して、私と同じように地下鉄を利用したくても利用できない人が沢山おられるであろうと思ったからである。心臓の手術をしてから4年目に入っている現在においても、あまり積極的に地下鉄を利用していない。従って、状況判断が間違っているかも知れないが、最も古い地下鉄線である東山線のどこかの駅で、過去2～3年の間にエレベータかエスカレーターが新たに設置されたところはあるのだろうか。松原市長が「選挙公約を守って地下鉄の駅にエレベータを設置した」というニュースは残念ながら聞いていない。我が家に最も近い地下鉄の駅・新栄町にもエレベータの施設は今もない。つい先日、最近敷設されたばかりの地下鉄桜通り線に乗車して、丸の内駅で初めて下車した。この線は、東西に走る東山線の下を南北に交叉して走る区間があるため、かなり深く掘り下げたところに敷設してある。深さ約30メートルはあるのではないだろうか。これは7～8階のビルの高さに相当する。従って、階段数は地上に出るまでに200段くらいになるものと思われる。上りはエスカレーターがかなり上部まで運んでくれるようになっているが、地上までは運んでくれない。最後の約60段くらいは自力で階段を上がらなければならない。

用を済ませて、同じ地下鉄丸の内駅の6番出入口に到達した。そこには1番から8番までの出入口の案内板が掲示してある。この掲示板にエレベータ設置場所の案内がしてあることを期待して探したが、期待は裏切られ、エレベータの所在箇所を見付けることはできなかった。仕方なく覚悟を決めて200段の階段を下りることにした。たよりになるのは“手すり”である。何処の地下鉄駅でも、エスカレーターは上り専用で、下り専用のものはめったにお目にかかることは無い。確かに階段の上りはエネルギーも使うし、健常者といえども体力が必要である。だからエスカレーターは上り専用になっているのであろう。しかし、下肢に障害のある者にとっては階段の下りも、上り以上に神経をつかわなければならない場合がある。私も過去、しばしば経験したことであるが、階段を1段下りた拍子に膝関節がガクンと外れたようになり、気が遠くなるような痛みで襲われうずくまってしまったことがあった。こうなった時は、必ず膝関節部分に内出血が起こっており、しばらく安静にしていなければならないことになる。整形外科に行き注射器で血液を抜いてもらおうと20～30ミリリットルにもなる。このような怪我を繰り返さないために、私は階段を下りる時

には必ず“手すり”を利用するようにしている。“手すり”に体重をゆだね、少しでも膝関節にかかる負担を軽くするためである。

1987年、文部省の短期在外研究員として私が米国に留学していた時の地下鉄利用の経験を少しここで引用してみることにしよう。“M”のマークで表示されるメトロと呼ばれる地下鉄がワシントン近郊を走っている。私はRed line からBlue line 地下鉄線に乗り換えて、Twinbrook という駅から14駅目のSmithsonian 駅までよく日曜日に出かけて行った。博物館めぐりを楽しむためである。一見、片田舎といえるTwinbrook 駅でも、上がり下がりのエスカレータは完備していたし、Smithsonian 駅では、地上に到達したときのエスカレータは、そこには屋根が無く、雨の日など雨に降られながらエスカレータに乗っているという日本では経験できないような経験をした。とにかく、最後の最後まで乗客を地上まで送り届けるという精神のあらわれなのであろうか。だから前記の名古屋市地下鉄丸の内駅でも、日本の技術なら地上の雨がかかる所までエスカレータをのぼすことだって可能なのではないかと言いたくなるころである。米国ではバリアフリーの配慮が随所に見られ、感心させられた。Washington National Airport でも歩行中、殆ど段差を感じる事がなかった。だから名古屋空港に帰ってきてから、荷物を両手に下げて階段を上り下りしなければならなかったのにはほとんど閉口した。バリアフリーに対する環境整備の米国と我が国との段差の大きさを痛感した次第である。

話はまた元に戻るが、特に幅の広い階段での昇降で困ることがある。それは“手すり”が階段の両側にしか設置されていないため、どちらかの端にわざわざ行かなければならないことが起こるためである。真ん中の2箇所ぐらいに“手すり”を設置されていたらなーと思うことがしばしばである。さらに悪いことには、最近若いジベタリアンのカップルが、“手すり”の近くの階段の上がり口とか下がり口に座りこんで、愛をささやいている？場面に遭遇する機会が多くなったことである。幅の広い階段で、こうなると“手すり”がまったく無い状態になってしまう。万事休す！である。う～ん、困った。松原名古屋市長さ～～ん！“手すり”の増設くらいはなんとかならないものではないでしょうか！

(平成11年8月15日記)

(名古屋大学名誉教授)